巻 頭 言

最近、各地の図書館の変身ぶりが、ニュースや新聞記事でよくとりあげられている。これまで図書館といえば知の宝庫と信じる人も多い反面、権威的でかび臭いイメージを抱いてしまう人も少なくなかった。しかも後者が増えていることは、多くの図書館が、とくに大学図書館が学生の利用者数を減らしているという現実が何よりも証明しているだろう。

そこで、各地の公立図書館や大学図書館では、より多くの人に来館して利用してもらおうと、グループで議論したり、ひとり静かに自分の領域を確保できるなどの多彩なニーズに応えられる空間づくりをするなど様々な工夫がなされてきている。明るく情報交換できる図書館への変貌だ。ラーニングコモンズを含んだ大学図書館も増えている。研究のための図書館から、学生の学習を支援する図書館への必然的な変革である。

この変化のすべてが本当に良いかどうかは早計に判断はできない。とくに一部の地方自治体のサービス業もどきの図書館改革は、財政事情から生じたものとはいえ、行き過ぎの感を禁じ得ない。ましてや近隣大都市の市長、知事による中央図書館の閉鎖案は、政治による学術、文化の否定であり、図書館に関わる人間として看過できるものではない。

しかし、多くの図書館改革は、多彩な利用者のニーズを反映し、現場の図書館員が創意工夫してなされようとしている。本学図書館は、このブームに単純にはのらないが、しかし全学的な、理解と協力を得ながら、決して立ち後れることなく根本的な改革、改造に全力で取り組むことを、図書館長として学生、教職員の方たちに約束する。

まずは従来の雑誌、新聞、資料、書籍のより一層の電子化を大学予算の許すかぎり推し進め、貴重書のデジタルライブラリ、リポジトリを通した学内研究成果の世界への公開、発信によって、本学における学術成果のグローバルな価値を高めたい。

また、大学図書館ではSGU（スーパーグローバル大学創成支援事業）採択に対応して、これから留学する学生、留学してくる外国人学生に、英語で日本および日本文化、クールジャパンを紹介する書籍のコーナー「Books on Japan」を新設した。加えて数多くの海外の新聞がタッチディスプレイで楽に読める装置も導入した。

一方、大学教育のアクティブラーニング化への対応のため、全学の同様の空間、サービスの中核として、大学図書館内にそのスペースを確保し、それを支える新たなサービスの実施によって、学習拠点としての使命を明確に果たしていきたい。

昨年、田嶋記念大学図書館振興財団の助成金を受けて『関西学院大学図書館史 1889年～2012年』を刊行したが、これに対して私立大学図書館協会賞を受賞した。このように今後も、大学、学院の支援のもとで、外部の競争的資金の導入を図りつつ、国際的な大学、図書館、博物館等との交流、連携を通じて、世界水準の大学図書館へ、そして何よりも関西学院大学の学生に多様に利用され、愛される大学図書館へとリニューアルしていく。

大学図書館長　奥野　卓司